サードコーチャー

中央台東小　手　塚　翔　斗

八月十八日、今日は小学校最後の野球の大会だ。ぼく達は、この大会のために今までつらい練習を乗り越え、「この最後の大会では絶対に優勝する！」と意気ごんでいた。

そして、いよいよ一回戦が始まった。まずは、レギュラーの発表だ。ドキドキしながら待ったが、ぼくの名前は呼ばれなかった。がっかりしていると、

「おまえは県で一番のサードコーチャーだ。信頼しているから、自信を持っていけ！！」

と監督に言われ、そんなムードはふきとんでしまった。ぼくは、左腕をけがして試合に出れない時期があった。そんな時覚えたのが、サードコーチャーだ。試合を決めてしまう役割に責任も感じたが、試合に出ていなくても何か役割があるという自分に自信が持てた。

一回戦は、ぼくの判断ミスで、大事なランナーを無駄にしてしまうこともあったが、終わってみれば五回コールド勝ちだった。みんなとても喜び、ぼくもとってもうれしかった。

二回戦の相手は、一度大会で負けている富田エンゼルスだ。リベンジ。前の試合とはちがい接戦になりそうなので、サードコーチャーは重要だ。ぼくは少しきん張していた。

試合はまさにシーソーゲーム。しかし、毛ほどの油断も命取りとなる大事な場面で、ぼくはミスをしてしまった。投手のワイルドピッチで、二るいランナーをホームまでつっこませてしまったのだ。判定はアウト。一点を争う大事な場面でミスをしてしまい、ぼくは責任を感じてベンチに帰った。でも、監督は怒らず、今の場面の指示の仕方を教えてくれた。一つ学習できた。

そして、いよいよ試合も大づめ。同点の七対七で延長に入った。八回は無得点、０点におさえなければいけない場面。ピッチャーの颯一朗君が力投。暑さと疲労でぼろぼろになりながらも、０点におさえる気迫の姿に、ぼくは感動した。九回、ぼく達は一点を加えた。しかし、また追いつかれた。そして十回。特別ルールで満るいからとなったが、ぼく達は一点も取れずに終わってしまった。力投していた颯一朗君も、最後はサヨナラで、マウンドに泣きくずれてしまった。

試合終了後のミーティングで、

「いい試合を見せてもらった。本当にいい試合だった。」

と監督に言われたときは、涙をこらえることができたが、お父さんの車に乗ると、涙が止まらなくなった。自分のせいで負けたという悔しさと、申し訳ないという気持ちでいっぱいだった。でも、帰ってからお母さんに、

「監督が、翔斗はとてもよくやってくれたと言っていたよ。」

と言われたとき、満足感でいっぱいになった。

ぼくは中学校でも野球を続けるつもりだ。今は下手くそだけど、サードコーチャーの経験を生かして、中学校で活やくできるようにがんばりたい。

（文集いわき２００８年 第４８号掲載）